

2004年2月号
 編集 銀河の里広報委員会
 代表 清水康宏
 発行 銀河の里
 〒025-0013
 岩手県花巻市幸田4-116-1
 TEL (0198)32-1788
 FAX (0198)32-1757

まだまだ正月気分も抜けきらないうちに暦はあつという間に過ぎていき、「銀河の里」でもみずき団子、どんと焼き、と次々に小正月の儀式を慌ただしく行ってきました。そして、先日、2月3日は節分ということで、利用者の方と一緒に豆まきを行いました。「鬼は外、福は内」という定番のフレーズはもちろん。「鬼の目玉をぶっ飛ばせ」なんて威勢のいいかけ声も飛び出して、まだまだ皆さん「鬼」に負ける気などさらさらありません。さて、普段私たちが使うこの「鬼」とは何なのでしょう。何となく、桃太郎に出てくる鬼のイメージが強いですが、はっきりとした「鬼」という言葉の起源は分かっていなく、「穏（おぬ）」が訛った言葉というのが一番有力な説のようです。ちなみにこの「穏（おぬ）」とは「みえないもの」という意味。それが、「普通の人には見えないもの」という意味だったのか、「実体のない物」という意味だったのかは分かりませんが、陰陽五行説的にいうと、「陰（マイナス）」の気が極端に集まったものの様です。そのイメージを具象化した物が桃太郎とかに出てくる鬼の姿なのかも知れません。と、なると「鬼」の使われ方にも長い歴史があり、昔は地蔵や、道祖神のまわりには結界があり、その結界の外にあるものが鬼であったり、その名残からか、通常暮らしている共同体の範囲外に済む人を鬼と捉えていたりもしたようです。昔の人が、外国人のことを赤鬼と呼んでいたのもその流れかも知れません。尤も、今でも「鬼」という表現はしなくても、いわゆる「外」に住んでいる人をなかなか受け入れられないという伝統は根強く残っている気がします。と、こんな事を調べてみると、豆まきもより一層意味が出てくるような気がします。「自分にとって鬼とは何だろうか」自然と豆まきをする手にも力が入ります。最近、節分はもちろんのこと、みずき団子などの伝統行事を小学校や地域で見直そうと復活させている所も目立ちます。どうせやるなら、昔はそれはどういう意図で行われていたのか、起源は何なのかも知れませんが、きちんと伝えてければいいなあと思います。今と昔、環境は大きく変わっていて、昔の人のリアルな気持ちを汲み取るのは難しいのかも知れませんが、昔の人の想いを少しでも感じながらやれば、その人にとっても大きな意味を持つ行事となるのではないのでしょうか。行為だけが残っていき、ただ単に「行う」事が目的とならないように、私自身もたくさんの方の事を見聞きし、伝えていければなあと思います。（及川）



どこにまくの？



いくつ食べばいいってえ



誰が鬼だってえ！！



寝っころがって



仲良く食事♪



子どもとはいポーズ！



中国雑伎団鑑賞

今月も、利用者、スタッフの何人かが誕生日を迎えました。周囲からの「誕生日おめでとう！」の声に対し、スタッフの反応は「ありがとう！」という反応がたいいで、ちょっと面白くありませんが、利用者の方々の反応は本当に様々で、面白いです。

ある方は「はあ？おらなんぼになったかなんて、いつつに忘れてさんたじゃ！別に何もしてくれなくていいからな。」と一言。ここで私は「ん！？」と考えてしまいました。「何もしなくていいからなんて、もしかして何かしてほしいのかな？」そう考えたら、私は突然笑ってしまいました。また、ある人は不気味に（！？）「フフフ・・・。」と笑っています。「えっ？何？どうしたの？」とその笑いの真意を、私は思わず聞いてみたくまりました。

本当に楽しい。今回は誕生日ということで、こういうやりとりができましたが、こういうやりとりを私はいつもしているはずだと感じました。でも、もしかしたら私はいつの間にか、利用者の方々の一つ一つの声や表情を流してしまっていたのではないかと感じ、少し反省しました。

さて、「利用者スタッフ」という、この関係はいつまでも変わらないかもしれません。でも、誕生日というその目を一緒に過ごし、笑っていられるというのはものすごく貴重なことなのではないでしょうか？温泉に行って、のんびりしてきたり、スタッフだけではなく、スタッフの家族までも一緒にあって、食事などを楽しんできたり、いろいろな楽しみ方があると思います。でも、本当に楽しむためには、関係がやっぱり成り立っている方が、その楽しさの度合いは、全く違うと思います。これからも、その時その時を大切にしながら、利用者との関係を築きつつ、こういったことも楽しんでいきたいと思えます。（清水）

ミワとミキコのおやつ日記

～アップルパイ編～

煮りんご

材料
 煮りんご・・・りんご6個
 砂糖1と1/2カップ
 レモン汁適量・水3カップ
 パイ生地・・・小麦粉400g
 バター240g・水1カップ
 塩2つまみ



①細かく切ったりんごと材料を入れ、煮る。



②バターを1cm角に切り、材料を全て入れこね、30分ねかす。



③伸ばした②に①を入れ、上に棒状の生地を乗せオーブンで焼く。

感想

うまい うまい リンゴ ミワ
 食べようよ 甘くてかたい
 にりんご
 皮むいて かたらしい
 性格出 ミキコ

ワークステージ「銀河の里」開所式を行いました

宮澤 健

2月1日、完成したワークステージ（知的障害者授産施設）の建設落成を受けて開所式を行いました。

4月からの運営開始ですが、儀式は済ませてしまっ、後は準備に万全を尽くしたいと早々の開所式となりました。

利用者はまだ決まっていないので、関係者へのお披露目といった趣旨になりますが、とりあえず完成のご挨拶というところですよ。

銀河の里らしく、形式にとらわれず、参加者がいくらかでも、こころも参加できたと感じるような内容にしたいと工夫しました。これまでも、フォルクローレの演奏グループ「マヤ」のコンサートにしたりと式典には工夫をしてきたのですが、今回は、講演会とシンポジウムということになりました。

テーマは「個の自立とコミュニティ」で、ここ8年来のつきあいとなった「竹林舎」の主宰で友友大和金融投資顧問会社の実践エコノミストでもある金岡良太郎氏に講師をお願いしました。

イギリスやカナダの政府機関の投資顧問としても活躍されてきた経歴と、シンクタンク「竹林舎」で、民俗学、心理学など幅広く研究されている幅広い見聞から、視点を広げてみたいと考えました。

講演のあと、岩手大学人文社会学部の横井教授との対談でさらに深めながら参加者も含めて考えていこうという企画にしました。

横井教授は社会学の立場から、地域、福祉などを岩手をフィールドとして30年に渡って調査されてきた方です。

お二人は、対談よりも、事前の打ち合わせや、終了後の時間、二人で話が盛り上がり時間が足りない感じでした。

特に教授は金岡さんが「エコバンク」という著作で、日本に「エコマネー」という概念をつくりだした嚆矢ととしての功績には尊敬の念を持って感心を寄せられていました。

お二人ともイリイチの社会学や玉野井地域学を基礎概念として学んできた事などの奇遇が話題に上るなどして二人の話は会場外でも大いに盛り上がり続けたのでした。

主催者としては、国や会社などこれまでの既存組織があまり頼りにならなくなってきた時代にあって、どう個を磨き、輝かすのか、その個が関わる身近な公としての地域コミュニティは今後どうあるべきなのか、そのあたりを、参加者共々意識し考えたかったのですが、なにぶん時間も少なく、また、参加者もまさか福祉施設の開所式でそんな話になるとは予想だにしていなかったこともあってか、あっけに取られているうちに終わってしまった感が強かったかも知れません。

私としては、「銀河の里」が他とは違う変わったところだと感じていただければそれで十分ありがたいと思っています。

これからも、他ではできない、考えられない、思いもよらない事を、若いスタッフ共々発想し挑戦し続けて行きたいし、また自らにもそういう生き方を課していこうと改めて決意を新たに開所式でした。



枯湯状態の薪・・・

これぞ薪ストーブ！



この火は特別！



ストーブの形も様々



岩手の冬は今年もまた寒い。そんな中、銀河の里の室内を暖めてくれているのが、薪ストーブなのですが、今年は昨年からの薪の準備を怠ったせいで、薪不足の毎日を送っています。最近では、薪がなくなりかけると、スタッフが大慌てで薪を切り出したり、知り合いの方から少しばかり譲ってもらったりと、てんやわんやといった感じです。

「どうしてこんな状況になったのだろうか？」と個人的に考えてみました。おそらくそれは、私たちに「薪ストーブで暖をとる」という考えがほとんどないからではないでしょうか。私たちは子どもの頃から今まで、違った暖房器具で暖をとってききました。石油ストーブやエアコンなど、手がかからない暖房器具で暖をとってきた私たちに「薪がなくなったら、ストーブはたけが、暖はとれない」という危機迫った思いはほとんどありません。私もはじめは、室内の寒さを感じても「薪ストーブじゃなくても、どうせ他の暖房器具があるからいいや」なんていう甘っちょろい考えしかありませんでした。

今、私がグループホームと一緒に暮らしている利用者の方々、薪があるかないか、常に気にしているようです。ストーブ横の薪が少なくなったと感じるやいなや、薪が積んである軒下で勢いよく向かったり、そこで太い薪を見つけたら「まさかじゃないのすか？」と薪を割るジェスチャー付きで話しかけてきたり、明らかに私とは、薪や薪ストーブに対する思いが違います。こういうことが、私たちにどこか特別なものになりつつありますが、実際は当然のことのような気がします。

私は最近、いつの間にか吸い寄せられたかのように、薪ストーブの背中を向けている時があります。それは、確かに時間や手間をかけた末、ようやく薪が出来上がり、それによって今暖がとれているのだと、ありがたく思う気持ちの他に、今の私たちが忘れかけつつある直接的な暖かさとは違った、いわば過去から働きかけられる温もりを感じたくてそうしているのかもしれない。そう思っているからなのか、私は今、薪ストーブが大好きです。建物の中で大きな存在感を放つ、薪ストーブとは里での暮らしの中で、今後ますます付き合っていきたいと思います。

(清水)

今月の短歌・俳句

転ぶよと腕を取ったが 我転び 渡辺

「じいちゃん達は元気だ。心臓に悪いから雪かきなんかやらなくていい」といふように、外に出る。慌てて追いかけて転ばないようにと腕を取った途端に自分が滑ってしまった。

虫だつて食わねば生きて 渡辺

いつも違う視点を教えてくれたMさん。冬場の農作業としてやっている、大豆の豆選り。「なんで虫のやろくちまうんだ」なんて言っていると、虫の立場から見た言葉が来る。ナルホドとまた思わされる。

帰り道 二人の空に 一番星 渡辺

一日何回出かけるんだろう。帰ると言ったり、買い物に行くと言ったり。今日も一日ほとんどお出かけで過ごした日さ。へとへとなりながら夕方の帰り道、一番星を二人で見つけた。今日も終わったねお疲れさま。明日も歩かからよろしく。星を介して日さんがそんなねぎらいをくれたように感じる。明日も頑張つてねと言いたい。

鳴かぬなら、鳴かぬで良いよ ホトトギス 及川

歩いてきた方が歩けなくなる。話すこともできなくなる方もあつた。でも鳴かそうとも待とうともしないでいこう。そのままを受けとめていこう。厳しい現実もある現場、それでもその人と行けるだけ行きたい。あるがままを受けとめていこう。

編集後記

あつという間にもう2月。私も24歳になりました。自分もまた一つ年を重ねましたが、通信もなんだかんだと言いながら、一号、また一号と発行されていきます。果たして、内容は充実しているのでしょうか？読者の方々が、どんなことを感じているかはわかりませんが、一つでも心に残る部分があれば、それが里と通じた瞬間だと思ひます。今後ともその瞬間を作れるよう、この紙面を用いていることを伝えていければと思います。